

保育空間における幼児の行動と断面的な構成要素との関係についての考察

The relation of child's behavior and the sectional space composition in a child-care facility.

稲葉 直樹 (Naoki Inaba) 指導：佐藤 将之

1. 研究背景・目的

保育施設の設置基準は、最低限求められる設備や居室、それらの面積は示されているが、高さに関する基準は少ない。そのため、断面的な視点での保育環境の評価、それらの空間での幼児の行動に関する研究は少ない。

そこで、本研究では断面的にも考慮された空間づくりに資するため幼児の行動を断面的に捉えることとした。断面的な構成要素ある空間での幼児の行動場面を対象とし、単に距離だけではなく、高さ情報を含めてそれらを捉え、幼児の行動と空間構成要素との関係を明らかにすることが本研究の目的である。

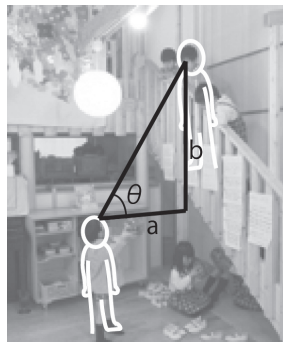
2. 調査概要

断面的な構成要素に着目し、規模や上部床への上り方法がそれぞれ異なる4園（名称よりON.KS.TY.MUと略す）の保育施設にて行動観察調査を行い、写真撮影及び図面への記入を行った。

3. 断面的な構成要素を介した幼児の行動

4園における断面的な空間要素を介して起った幼児の行動を「見渡し」「アピール」「見上げ」「呼びかけ」「基地」「発表」「接触」「会話」の8要素に分類した。

これらの行動場面を、本研究では三角ベクトルを用いて表記する。幼児の目の位置を結び、それを斜距離とする。その平面方向・断面方向をa, bとし角度を θ とする（図-1）。



4. 三角ベクトルによる考察

三角ベクトルを断面図に記録し、幼児の行動様態を記録すると、三角ベクトルは空間的特徴に影響を受けることが分かる。例えば、細長い廊下状の空間では三角ベクトルは水平方向に拡大される等の特徴が観察されている。

断面プロットにより、同一の行動が起こりやすい場所が見受けられ、高さにより空間に役割がもたらされ、空間の差別化が起こることが表された。

また、三角ベクトルのうち高さbが極小のものが観察されたが、その場面は保育者と幼児が視線の高さを合わせていた。このことから高さの選択肢があることにより、平面

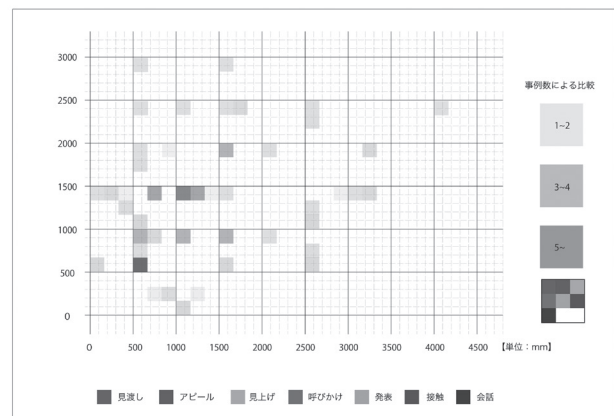
のみの空間とは異なる交流が生まれることが分かる。

5. 年齢による行動の違い

調査地KS園では、4, 5歳児の行動観察を行ったところ、5歳時は行動の種類が増加し、三角ベクトルの大きさも拡大した。

6. 行動の発生する距離

行動が発生しやすい距離に関して考察を行うために、a, bの関係をD/H図として示す。D/H図はaをx軸、bをy軸に取る。更に、D/H図において行動が観察された範囲を500mmごとに27に分ける。その結果、a=b=500~1000mmの範囲の事例数が最多となった。



7. 幼児の行動への影響を与える空間要素

幼児の行動に影響を与える空間要素として「1.階段 2.窓 3.ロフト 4.ロフト（通路型） 5.複数ロフト 6.お立ち台 7.細長展望台 8.ステージ」の8要素を抽出した。それに付随し視線が変化する手摺り等のデザインも行動に影響を与えることが分かる。

8. まとめ

本研究から以下の5つの観点がいえる。

- ・断面的な構成要素により見渡し等の特有の行動が起こる。
- ・行動の発生しやすい距離が定義される。
- ・幼児は自ら高さを選択し、高さに沿った行動をとる。
- ・視覚の概念の空間計画への活用の重要性。
- ・年齢に合わせた空間の断面計画。

これらの考察が今後の保育空間の断面的な計画・設計に必要であると考えられる。